

反実仮想の歌

—教育学部の授業から—

鈴木 宏子
千葉大学・教育学部

“Hanjitsu-kasou”

—in Waka—

SUZUKI Hiroko
Faculty of Education, Chiba University, Japan

小稿は、学部や大学院で行なっている古典和歌に関する授業についての覚え書きである。具体的には「反実仮想」の和歌を取り上げる。反実仮想は、和歌の中にもしばしば見られる語法で、和歌という短詩型の中にあることで、その特質がよりはっきり見える場合がある。反実仮想とは、願望と、その願望の成就是不可能であるという認識とを、二つながら同時に表現するものである。また不如意な現実の中にあつて、想像力を発動させる発想形式であると言ふことができる。

キーワード：反実仮想 (hanjitsu-kasou)・古今集 (Kokin-syu)・万葉集 (Manyou-syu)・和泉式部 (Izumi-shikibu)

大学の古典の授業で学生に接していると、「古文は嫌いではありませんが、文法は嫌いです」という声を耳にすることがある。言葉の仕組みについて考えるのは面白くありませんかと尋ねてみると、問題はそういうことではなく、高校時代に「受験に必要である」という理由でひたすら棒暗記をした結果、否定的な印象が強く

にしていくなことはできないだろうか。小稿は、授業の中で取り上げた具体例についての覚え書きである。

*

なつてしまったということであるらしい。教育学部で古典を担当する教員としては、彼らの多くが中学校・高等学校の国語科教員の免許取得をめざしている以上、やはり文法の基礎知識は身につけてほしいし、そうした否定的な印象を拭いさつて卒業してもらいたい。文法を学ぶことは私たちの言語について内省する契機となる

古文には「反実仮想」と呼ばれる語法がある。高校生を主たる対象として書かれた文法書では、たとえば次のように説明されている。

し、特に古典文法の場合は、先人の書き残した文章を的確に読み解いていくための道具を手に入れることでもある。「重要古語や古典文法についての知識があるからこそ私たちは簡単に古文が読めるのですよ」と言うと、学生は困ったなあとこの顔

量する表現のこと。次のような形がある。

・……ましかば……まし
・……ませば……まし
・……せば……まし
・……ば……まし

で笑うのだが、「棒暗記した」という彼らの知識を、いささかでも血の通ったもの

例文として、高校の教材としてよく取り上げられる『徒然草』の中から、

鏡に色、形あらましかば、うつらざらまし。(徒然草・二三五)

やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。(徒然草・三二二)

が引かれている(以上、引用は小町谷照彦氏監修『読解のための新古典文法』東京書籍・一九九五年、による)。

実は古典和歌の中にも反実仮想を一首の骨格とした作品が多々あり、この語法について考えるための好材料となる。たとえば『古今集』には次のような歌がある。

寛平御時后宮歌合の歌

1もみぢ葉の流れざりせば龍田川水の秋をば誰か知らまし

(古今集・秋下・三〇二・坂上是則)

一読してわかるとおり「……せば……まし」という反実仮想の構文を持つ歌である。一首の意は、龍田川に色とりどりの紅葉が流れることがなかったなら、水にも秋が来たことを誰が知るだろうか、というもの。この歌に詠まれる「龍田川」や「龍田山」は、古典和歌の世界では紅葉の名所として認識されている。龍田山を彩った紅葉はやがて散って、龍田川の川面を錦のように流れていくと捉えられるのである。

「龍田川を流れる紅葉」という構図は屏風絵にも見られ、「もみぢ葉の流れ」とまゐるみなどには紅深き波や立つらむ(古今集・秋下・二九三・素性)や「ちはやぶる神代も聞かず龍田川韓紅に水くくるとは」(古今集・秋下・二九四・在原業平)といった屏風歌も詠まれるなど、平安朝の人々の好尚に適ったものであった。1歌は、川を流れる美しい紅葉を眼前にして、それによって「水」にも秋が到来していたことに気づいたという内容だが、歌の表現としてはこれを裏返して「もし……なかったら……に気づかなかつただろうなあ」と詠じている。美しい光景によって、この世にあまねく秋が訪れていたことを発見した感動を、反実仮想の形で表現した歌である。「紅葉が川を流れる」という現実には基本的に見望ましいものであり、肯定的に捉えられていると言える。

ところが、和歌に見られる反実仮想を拾い出していくと、1歌とは逆に、不如意な現実と直面してそれとは異なるあり方を仮想する、という例の方が目につく。たとえば次の歌もその例である。

寛平御時后宮歌合の歌

2梅が香を袖に移して留めてば春は過ぐとも形見ならまし

(古今集・春上・四六・よみ人知らず)

1歌同様「……ば……まし」という反実仮想の構文を持つ歌である。一首の意は、梅の花の香を袖に移して留めておいたなら、春が過ぎても思い出のよすがとなるだろう、というもの。王朝人は香りに対して鋭敏な感性を持ち、馥郁たる梅香は春歌の大切なテーマの一つであった。「梅の花立ち寄るばかりありしより人のとがむる香にぞしみる」(古今集・春上・三五・よみ人知らず)のように、梅香は近づいた者の身に染みついたり、誰かの移り香かと誤られたりもする、なかなか艶麗なものであった。しかし、はかなく移ろってしまふのが花、そして花の香の宿命である。2歌は、「もしも梅香を袖に移し留めることができたなら」と事実と反すること仮定し、さらに「もしそうだったら」春という美しい時が過ぎた後も思い出の品にできるのに」とあらまほしい想像を展開させていく。現実には梅香を移し留めることはできないし、香によって春をなつかしむこともできない。そのことが十分わかった上で、歌人は事実と反する耽美的な想像をふくらませているのである。

四季歌以外の例も見よう。

源実が筑紫へ湯浴みむとてまかりける時に、山崎にて別れ惜しめる所にてよめる

3命だに心にかなふものならばなにか別れの悲しからまし

(古今集・離別・三八七・白女)

源実が九州まで湯治に出かけていったときに、山崎で送別会をした所で、白女という女性が詠んだ歌である。「山崎」は淀川の船着場。ここから船に乗って西に向かった。白女は江口の遊女であったという説もあるが、実との関係も含めて伝の詳細はわからない。ともあれ、男との別れを惜しんで女は「命さえ意のままになって、あなたの帰りを待つことができるものならば、どうして別れがこんなに悲しいでしようか」と歌っている。ただでさえ別れはつらいものであるが、その上命は不定であって再会の日まで生きていられるかどうかかわからない、だからなおのこと今日の別れが悲しくてならない、というのである。本来ちよとした旅立ちであったかもしれないものが、「定めない命」という要素を持ち出したことで、心から惜しまれる別れに変わっている。そして「命だに心にかなふものならば……」という反実仮想によって―これは人間の見果てぬ夢であろうが―別離の悲しみと、できることなら生きて再会したいという願いが、より痛切なものとして形象化されているのである。

る。

このように、反実仮想の歌には、意のままにならない現実に対して、こうあってほしいという願望を表明する例がまみえられる。このような場合、反実仮想という語法は、切実な願望とその願望の成就是不可能であるという認識とを、二つながら同時に表現することになる。この点で「反実仮想」を行なう精神は、悲しみの感情とも近いものであろう。

こうしたことを念頭において、やや複雑なレトリックを用いた歌についても考えてみよう。

物思ひける頃、ものへまかりける道に、野火の燃えけるを見てよめる

4 冬枯れの野辺と我が身を思ひせば燃えても春を待たましものを

(古今集・恋五・七九一・伊勢)

この歌にも「……せば……ましを」という反実仮想の構文が見られる。『古今集』の恋五は恋の終末期の歌を取めている。4 歌は、詞書に「野火の燃えけるを見て」と記されるとおり、恋を失った女が早春の野焼きの炎を目にして、わが身の境涯と引き比べて詠んだものである。一首の意は、恋しい人に忘れられた私の身を「冬枯れの野辺」と思うことができたなら、野火が燃えるように思いの火に燃えて再び巡ってくる春を待つのだが。「冬枯れ」には恋人が自分から離れ去っていく意の「離れ」が掛かり、野火が「燃える」とことと自分が恋の情熱に「燃える」ことが重ねられている。冬枯れは和歌に詠まれる景の中でも冷えさびたものの一つである。同じ冬であっても、雪景色の場合は美を感じることもできるし花の幻を見ることもできる。しかし枯野は「山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば」(古今集・冬・三一四・源宗干)と歌われるとおりひたすら寂しい。しかも4 歌は、寂しい「冬枯れの野辺」でさえありえない存在としてわが身を捉えている。この歌には、せめて冬枯れの野辺のように野焼きの火に燃えながら春を待ちたいという願いと、自分の恋には二度と春の日はやってこないのだという絶望的な認識とが、二つながら歌われているのであった。

大切な人の死は、人生の中で避けがたく遭遇する出来事である。「もし……であつたなら……」という反実仮想は、当然のことながら挽歌や哀傷歌の中にもしばしば見受けられる。

天皇の大殯の時の歌二首(その一首目)

5 かからむとかねて知りせば大御船泊てし泊まりに標結はましを

(万葉集・巻二・一五一・額田王)

6 君とまたみるめ生ひせば四方の海の底のかぎりは潜きみてまし

(和泉式部続集・九九〇)

5 歌は、天智天皇挽歌の一首で、反実仮想を用いたもつとも古い歌の一つである。歌意は、このようになるのであればかじめわかつていたなら、天皇の御船が停泊した港に標縄を結んでおいたのに、というもの。琵琶湖のほとりに都を築いた天皇にふさわしく、この歌の中では死は船出のイメージで捉えられている。それを踏まえて、大切な天皇の魂を乗せて旅立ってしまったと知っていたら、港に標縄を結んで船出をとどめたのに(悪霊の侵入を防ぐために標縄を結んでおいたのに、と解する異説もある)というのである。6 歌は、『和泉式部続集』の「帥宮挽歌群」の中の一詩である。「みるめ」は「海松布」と「見る目」の掛詞で、もしもあなたと再び逢うことができるなら、海松布を求めてあらゆる海の底まで潜っていくように、どのような困難にでも耐えるのに、という歌である。「海松布」と「見る目」の掛詞は古典和歌の常套表現であるが、これを媒介にしてもたらされた、海という海を潜りつくすというイメージには、すさまじいものがある。これらの歌は、死という事実そのものを覆そうとする「泣く涙雨と降らなむ渡り川水増さりなば帰り来るがに」(古今集・哀傷・八二九・小野篁)や、人間の悲しみに自然も感応せよと命じた「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け」(古今集・哀傷・八三一・上野岑雄)などに比べると弱々しいとも言えるが、ただ悲嘆の思いを述べているのではなく、新たなイメージを喚起する力を持っている点に注目したい。

先に私は、反実仮想とは、切実な願望とその願望の成就是不可能であるという認識とを、二つながら同時に表現する語法であると述べたが、さらに加えれば、不如意な現実を歌いつつも、同時に想像の翼を解き放つ力を持った発想形式であると言えることができる。

再び四季歌に目を転じたい。次の歌は『古今集』の桜の歌の中でもよく知られたものであるが、反実仮想の例としても好適である。

渚院にて桜を見てよめる

7 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

(古今集・春上・五三・在原業平)

歌意は、この世の中に桜というものがまっただけなら、春の人々の気分はどんなにかのんびりしたものだろうに、というもの。「春の心」は漢語「春心」の翻訳語かと考えられている珍しい表現で、春という季節の雰囲気と春の人々の気分を融合させたような言葉である。この歌では「もしも桜がなかったなら」という仮想が行なわれているのだが、もちろん桜が嫌いだというわけではない。咲くにつけ散るにつけ、桜をめぐる一喜一憂せずにはいられないのである。そのような春の心の騒がしさ！いっそ桜がなかったら人の心はどれほど穏やかだろうか、という思い切った物言いは、桜が大好きでたまらないことの裏返しである。7歌は、桜を愛でる思いを反実仮想の論理によって表現してみた歌なのである。ここでは論理がそのまま抒情となっている。

*

和歌を用例として文法事項の再チェックすることには、両刃の剣のようなところがある。和歌の中には、日本人が脈々と受け継いできた自然把握や心情表現の型が凝縮されている。また三十一音の中で一つの完結した世界を持つために、一つの言葉の特徴が際やかに表われている。一首の歌についてさまざまな角度から考えてみることは、言語と文化についての知見を深めることにつながるであろう。しかし学生たちは、和歌についても敷居が高い、訳がわからないといった抵抗感を持っている場合が多い。そのような抵抗をとりのぞきつつ実りある講義を行なうことが、教員としての私の現在の課題である。

○『古今集』と『万葉集』の引用と歌番号は小学館新編日本古典文学全集による。『和泉式部集』の引用と歌番号は岩波文庫『和泉式部集』による。ただし読み易さを考えて私に漢字を宛てた箇所がある。

【付記1】小稿は、平成十五年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「受験用古典からの脱却を図る新しい時代における教養教育としての古典教育に関する研究」(研究代表者 寺井正憲)による研究成果の一部である。

【付記2】小稿で掲げた具体例その他について、さまざまな意見を述べてくれた平成十六年度大学院「国文学史特講」受講者にお礼申し上げます。